

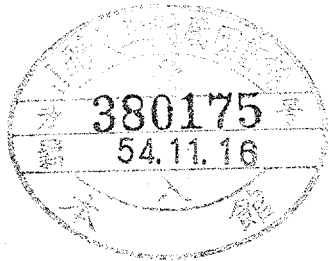
今田信一著

改訂

最上紅花史の研究

高陽堂書店

題簽
加藤
諄





紅花

左の紅花屏風は、東根・六田の画家青山永耕が、幕末の文久頃に描いたものである。彼の生地が最上紅花の主要生産地であっただけに、その描写が実に写実的で、干花の生産と流通の状況を写して余す所がない。

第一景は農家の豊かな春祭り、第二景は花鳥の遠望で、早くも京都からの買付け商人の姿も見える。第三景では、農家の庭先における干花加工の様子、第四景では荷問屋の荷造り作業を写しているが、両景共に筆細かに、しかも躍動的な場面を捉えている。

第五景は紅花船の敦賀入港の状態で、二十艘程の船が見えるが、船印からすれば、殆どが山形の有力紅花商人であることが知られ、史料的にも貴重な場面である。最後の第六景は京都の老舗(美濃屋の店頭で、最上紅花荷が何十駄と積まれ、二階座敷では取引きの交渉が行なわれている。如何にも京都らしい風俗も丹念に描かれていて面白い。(長谷川吉内氏蔵)



3

2

1



6

5

4

序 文

その地方の農業経営の進歩の程度は、一般に労働力の集約の度合、貨幣経済の浸透の深淺、生産技術の高低などを指標として論じられる。そして、東北地方のそれは常に近畿以西の地方に比して後進的と言われてきた。しかしこういう概括的な見方の中にあつて、近世初期以来「商業的農業」を漸次発展させて来た村山地方は、むしろ近畿型の性格を持っていたことは、最近の多くの研究によって立証されて来たところである。

村山地方における商業的農業の中心を占めた商品作物は、近世三百年を通じて紅花であつた。この紅花は「最上紅花」の名をもつて、日本の染料原としては「阿波藍」と並び称され、三都の需要に應じて来た。そのために、早くから前期的商業資本の投入が行なわれ、生産と流通の構造、機能が整備されて、東北地方でも特異な進歩的農業経営の地帯を形成したのである。このことは言うまでもなく、生産と流通という作用を通じて、農村社会経済史の展開の上に重要な役割を果した。

戦後、地方史の研究が著しく進んだが、その中にあつて、最上紅花のもつ意義が新たな視点から見直され、多くの研究者によってその対象に取り上げられた。研究の課題は各方面に亘り、これまで詳細な分析的論考が数多く学界に発表になつてゐる。特に生産と農村経済の問題、都市市場と在方市場の構造および流通の問題、商業資本形成の問題、或は地主制成立過程の問題など、幅広い研究業績があるが、これで課題が尽きた訳ではない。将来はさらに研究の分野が開拓され、深められて行くことであらう。

ただ目下の処、最上紅花の持つ生産と流通の経済史的意義を、全体的に歴史的に把握しようとした試みは少ない。著者は戦前に故渋沢敬三先生の指導を受けて、「最上紅花史料」を公刊したが、戦後の新しい研究の視野からすれば、正に反故的存在となつてしまつた。戦後になつて、伊豆田忠悦氏によつて二、三の優れた概説的論考が発表になつたが(日本産業史大系・東北地方篇、その性格上、充分に言い尽くせない点のあることは止むを得ない。その後を受けて体系日本史叢書・産業史Ⅱ)、世に出そうとする本研究は、近世の最上紅花の生産構造とその流通過程が、村山郡内の社会経済史上どの様な意味を持ち、歴史的にどのよう展開して来たかを、可能限度の資料に依拠して叙述しようとした試みである。勿論、この研究の根底をなしているものは、先学によつてなされた研究成果で、その学恩に対しては深く感謝しなければならぬ。

この稿を起こそうと決心する迄には、多くの方々の激励と指導とを賜つたが、いよいよ出版の段階に至つては、三春伊佐夫氏が主となつて刊行会を組織し、井場書店のために支援の労を惜しまれなかつた。柏倉亮吉氏を代表とするその刊行会には赤塚長一郎、阿部西喜夫、伊豆田忠悦、今泉享吉、梅津保一、沖津常太郎、工藤定雄、佐藤不二雄、三春伊佐夫、横山昭男の諸氏が名を連ねて下さつた。題名は特に早稲田大学教授・加藤諄先生から戴いたものである。なお巻頭写真については所蔵者長谷川吉内氏の並々ならぬ御配慮をいただいた。共に記して心から御礼を申上げる。

昭和四十七年九月一日

目次

序章 最上紅花の概説

- 第一節 紅花文化の發展 3
 - 第二節 近世の紅花生産地 6
 - 第三節 最上紅花生産の起源 9
 - 第四節 最上紅花發展の素因 14
 - 第五節 流通機構の組織化 20
 - 第六節 本書のねらい 22
- 第一章 生産高と品質の評価
- 第一節 生産高の向上 27

目次

最上流の干花製法 27 年産「最上干駄」 29 生産高の全国的地位 35 栽培面積の拡大化 37
生産者の収益性 44

第二節 最上紅花の評価と相場 50

最上紅花の一般的評価 50 最上紅花の相場の概観 51 京都市場における最上紅花 55

第三節 品質低下の問題点 61

生花生産の不適正 61 量産主義の傾向とその弊害 66 耕種法の未熟 69 干花加工上の不正 74
出荷業者の量目の不正 78 新興生産地の品質向上 83

第二章 幕藩財政上の最上紅花

第一節 荷役制度の整備 89

幕藩の紅花荷役制度 89 紅花荷役と幕藩財政 94 荷役徴収率の更改と口留番所の整備 97
山形藩の抜荷防止対策 107 公領代官の市場統制策 111

第二節 金納源としての紅花収入 119

貢納米の金納化 119 堀田藩の高掛金と紅花収入 121 戸沢藩財政の紅花収入依存 126
上ノ山藩の指定花買宿と役銭 130 農民層分解の進行 132

第三節 幕藩庁の紅花栽培奨励 136

山形藩の奨励策概要 136 紅花種移出禁止令 143 郡中議定による紅花種の密移出対策 145

米沢藩の生産事情 151 庄内地方の作付禁止令 154

第四節 紅花専売制の不成立 159

上杉藩の紅花買上制 159 水野藩の専売制と工業化の計画 164 織田藩の専売仕法 168
専売制不成立の地域性 172

第三章 紅花商人の成立と発展

第一節 紅花の集荷機構 179

目早とサンベ 179 目早仲間成立と変質 181 小仲買人サンベの性格 187 花買宿の発達 190
荷問屋の発生 194

第二節 山形・花市場の変遷 198

花市場の成立 198 花市場の機能の低下 203 花市場の衰亡 207

第三節 江州・伊勢商人の市場開拓 211

日野商人の山形進出 211 日野系・村居家と浜村家 214 山形・八幡商人の系譜 218
天童・日野屋の変遷 220 伊勢商人の活躍 221

第四節 近世中・後期の山形紅花商人 227

発展の概説 227 佐藤一族の発展 233 長谷川一家の活躍 240 永寿講と長明燈 243
その他の山形紅花商人 248

目

次

第五節 在方紅花商人の勃興 251

商品物資の生産と在方商人の発生 251 在方紅花商人の成立期 257

近世中期に成立した在方の紅花商人群 259 上層農民の干花加工業参加 266 干花加工農民の経営構造 268

第六節 異色の在方紅花商人 275

山間に成立した稲村家 275 尾花沢盆地の紅花商人たち 283 柏倉家の特殊な機構 289

支配人から成長した本木家 296

第七節 上方商人との取引形態と代金決算法 302

産地直買いと宿 302 相対取引法と為任取引法 307 相対・委託取引法の実際 310

京都・荷問屋の卸売り 316 代金の決済法 318 代金回収不能と出世証文 324

第四章 複雑な輸送慣行

第一節 羽州街道の駄送 333

山形・大石田間の紅花輸送法 333 紅花駄送慣行の強化 337 新河岸設置問題 343

脇街道駄送の禁止 346 宿駅継立に関する諸規定 352

第二節 北海廻り敦賀經由の輸送法 358

大石田の川下げ規定 358 北海運漕と敦賀荷揚げ 362 海上輸送と破船対策 366

敦賀・大津間の輸送法 375 運賃及び輸送日数 379 大津荷問屋の不正行為 382

第三節 陸路江戸廻りの輸送法 368

江戸廻りの送法 386 笹谷街道駄送の勧誘 395 江戸廻り出荷量の推定 398

第四節 奥州紅花荷の羽州通過 402

伊達藩の紅花移出制度 402 仙台紅花の羽州通過 403 南部・奥仙紅花の大石田河岸出し 407

第五章 紅花流通機構改革運動の展開

第一節 紅花問屋仲間制度の成立 413

紅花問屋仲間稲荷講の結成 413 紅屋仲間講の分立 418 紅花問屋と紅屋の公認 420

第二節 問屋制度反対運動の展開 426

不安内在の問屋制度 426 自由相対売買慣行の復活運動 429 旧制復活運動の失敗 436

運動態勢の弱体 438

第三節 機構改革運動と問屋制度の廃止 442

紅花売買場所の新設請願 442 大阪に新問屋設置 445 紅花売買場所設置に付再願 447

勸定奉行の審理 450 紅花問屋株仲間の廃止 456

第四節 紅花世話所の仮設承認 461

旧問屋の紅花荷宿経営 461 紅花世話所設置計画 463 紅花世話所仮設の承認 467

旧問屋系商人の策謀 469 定問屋制復活運動 473

第五節 紅花会所開設計画の運動 477

紅花会所設置計画 477 生産農民の反対 483 第二次紅花会所設置運動 487

第六節 公領名主たちによる新改革案の提唱 492

名主たちの企画する紅花世話所 492 内仲間の結成と荷受問屋新設案 495

第七節 機構改革運動不成立の問題点 502

審理の遅延と奉行所の立場 502 消極的な町方商人 507

第六章 問屋制度改変に伴う新事態の発生

第一節 江戸打越荷の問題 515

問屋仲間制度の禁止と復活 515 江戸打越荷禁止令要求 517

打越荷禁止令の成立と最上商人の動向 521

第二節 京都における紅花撰花問題 532

撰花仲間の成立 528 撰花制度の混乱 537 撰花仲間に対する抵抗 539

御服御用仲間と紅染屋の協力 542

第三節 大阪紅花仕入問屋組織の成立 546

撰花問題の波及 546 紅花仕入問屋仲間組織 548

第七章 最上紅花衰退の原因

第一節 新産業政策の影響 555

明治初期の産業政策 555 新産業の紅花生産に与えた影響 559

第二節 外国染料輸入による打撃 562

中国紅花・印度紅花の輸入 562 化学染料による圧迫 565

第三節 最上紅花衰亡の実態 569

明治期における生産の推移 569 最上紅花商人の変質 571 京都・最上屋の場合 576

第四節 最上紅花復興計画 581

明治二十年前後の復興計画の失敗 581 皇室御用としての紅花の保存 587

結語

次 付索引

目